

平成 18 年度厚生労働科学研究費補助金

子ども家庭総合研究事業

子どものライフステージにおける  
社会的養護サービスのあり方に関する研究

平成 17 年度～18 年度 総合研究報告書

主任研究者 庄司 順一

平成 19 (2007) 年 3 月

## 目 次

### I. 総合研究報告書

子どものライフステージにおける社会的養護サービスのあり方に関する研究 主任研究者 庄司 順一	----- 2
---	---------

II. 研究成果の刊行に関する一覧表	----- 8
--------------------	---------

平成 18 年度厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）（H17-子ども-004）  
子どものライフステージにおける社会的養護サービスのあり方に関する研究（主任研究者：庄司順一）

## 総合研究報告書

# 子どものライフステージにおける社会的養護サービスのあり方に関する研究

主任研究者 庄 司 順 一

日本子ども家庭総合研究所 福祉臨床部長

### 研究要旨：

児童虐待は、児童をめぐる今日の問題の中でもっとも重要な課題といえる。虐待などにより、生まれた家庭で育つことのできない要保護児童の養育のあり方、および虐待を受けた子どもとその養育支援者への治療的かかわりについて関心が高まっている。

本研究では、第 1 に、乳児院、児童養護施設など児童福祉施設とともに里親制度をも視野に入れて、子どものライフステージにおける社会的養護サービスのあり方について検討を行った。そして第 2 に、虐待を受けた子どもとその養育を支援する大人（施設職員、里親）とのアタッチメント（愛着）形成をはかるための治療的プログラムの作成を試みた。

これらの研究を実施するために、児童福祉学、心理学、小児精神医学、栄養学、建築学などの学際的な研究チーム（分担研究班）を組織した。

具体的には、分担研究 1「子どものライフステージにおける社会的養護サービスのあり方に関する研究」（分担研究者 庄司順一）に関しては、平成 17 年度は、専門家の論考、文献研究により課題を整理するとともに、児童養護施設における環境を、建物設備や食事という面から調査研究を行った。平成 18 年度は、さらに詳細な分析を行うとともに、関係者へのヒアリングなどにより、小規模化の意義と課題、小規模化の推進を阻害する要因の分析を行った。また、虐待を受けた子どもを養育する専門里親を活用する条件についても検討を行った。

分担研究 2「愛着障害の視点からの被虐待児に対する援助・治療プログラムの開発」（分担研究者 藤岡孝志）に関しては、近年注目されている愛着障害の視点からの虐待を受けた児童に対する援助・治療プログラムの開発について検討を行った。とくに愛着形成に障害をおった子どもと養育者の関係形成を促進するプログラムを作成し、実践した結果をふまえて、改訂した。

本研究の成果は、国が推進している小規模グループケア等による緊密な関係性に根ざした支援体制の意義、実効性を検証することにつながると考えられ、今後の社会的養護のあり方に関して、支援環境、支援内容についての方向性を示すことになることが期待される。また、虐待を受けた児童の治療の基本ともいえる愛着形成の援助プログラムを開発することにより、被虐待児の援助・治療に大きな進展がもたらされることが期待される。

分担研究者氏名：所属施設及び所属施設における職名

庄司順一 日本子ども家庭総合研究所 福祉臨床担当部長

青山学院大学 教授

藤岡孝志 日本社会事業大学 教授

## A. 研究目的

児童虐待は、児童をめぐる今日の問題の中でもっとも重要な課題である。とくに、虐待を受けた児童を保護する場である児童福祉施設や里親（専門里親）のあり方と、虐待を受けた児童の援助、治療の方法の確立は緊急の課題といえる。

わが国では、親の死亡や虐待などにより、生まれた家庭で育つことのできない要保護児童の養育は、乳児院、児童養護施設など児童福祉施設が主として担ってきた。これら施設は、戦後、戦災孤児対策として制度化されたものであり、その後の要保護児童とその家族の変化、つまり保護者がいる児童がほとんどを占めるようになり、しかもその保護者からの虐待を受けた児童が大半となった現状に、十分対応しきれていない。こうした状況において、社会保障審議会児童部会報告書「児童虐待への対応など要保護児童及び要支援家庭に対する支援のあり方に関する当面の見直しの方向性について」（平成15年11月）は、家庭的養護（里親制度）の推進や施設の小規模ケアを提言した。

近年、英米では虐待を受けた児童を愛着障害としてとらえ、これに関する研究もしだいに増加しつつある。その背景には、ルーマニアなど旧社会主義国の劣悪な孤児院に收容されていた子どもたち（チャウシェスク・ベイビーということもある）が、イギリス、アメリカ、カナダなどで国際養子縁組として養育され、これらの子どもたちの行動や社会適応についての研究がすすんだこと、およ

び欧米の里親養育では里親家庭を転々とする場合が多く、特定の養育者とのアタッチメント関係の形成と破綻が繰り返され、その結果として子どもたちがさまざまな心理行動上の問題をあらわすことに関心もたれたことを指摘できよう。

被虐待児やアタッチメントに問題をもつ子どもたちの研究は、従来、トラウマ（心的外傷）へのアプローチが主として検討されてきたが、最近ではアタッチメントの重要性に関心が向けられるようになってきた。これらのことは、アタッチメントの問題が、社会的養護サービスのあり方という点でも、虐待を受けた児童の治療においても中心的課題であることを示している。

そこで本研究では、第1に、乳児院、児童養護施設など児童福祉施設とともに里親制度をも視野に入れて、子どものライフステージにおける社会的養護サービスのあり方について検討を行った。そして第2に、虐待を受けた子どもとその養育を支援する大人（施設職員、里親）とのアタッチメント（愛着）形成をはかるための治療的プログラムの作成を試みた。

## B. 研究方法

本研究では、発達心理学、臨床心理学、児童福祉学、小児精神医学、建築学、小児栄養学などの領域の専門家からなる学際的な研究チームである2つの分担研究班を組織し、文献的研究、アンケート、ヒアリング、実践的研究を行った。

## 研究協力者

### (分担研究1)

- 有村大士 (日本社会事業大学、児童福祉学)  
伊藤嘉余子 (埼玉大学、児童福祉学)  
井上 寿 (環境デザイン研究所、建築学)  
大和田夏美 (日本子ども家庭総合研究所、児童福祉学)  
尾木まり (子どもの領域研究所、保育学)  
奥山真紀子 (国立成育医療センター、小児精神医学)  
小山 修 (日本子ども家庭総合研究所、母子保健学)  
加賀美尤祥 (児童養護施設山梨立正光生園、児童福祉実践)  
梶原 敦 (北海道子ども未来づくり推進室、児童福祉行政)  
菊池正敏 (神奈川県児童福祉課、児童福祉行政)  
北 道子 (心身障害児総合医療センター、精神医学)  
久保田まり (東洋英和女学院大学、発達心理学)  
斉藤多江子 (聖セシリア女子短期大学、保育学)  
才村 純 (日本子ども家庭総合研究所、児童福祉学)  
佐久間てる美 (日本子ども家庭総合研究所、児童福祉学)  
澁谷昌史 (日本子ども家庭総合研究所、児童福祉学)  
下泉秀夫 (国際医療福祉大学、小児医学)  
杉村伸二郎 (東京恵明学園乳児部、児童福祉実践)  
鈴木 力 (聖徳学園短期大学部、児童福祉学)  
鈴木祐子 (二葉乳児院、児童福祉実践)  
須永美紀 (青山学院大学、保育学)  
谷口純世 (愛知淑徳大学、児童福祉学)  
堤ちはる (日本子ども家庭総合研究所、小児栄養学)  
鶴飼一晴 (児童養護施設唐池学園、児童福祉実践)  
中山 豊 (東京工業大学、建築学)  
西澤 哲 (大阪大学大学院、臨床心理学)  
平田ルリ子 (清心乳児院、児童福祉実践)

### (分担研究2)

- 加藤尚子 (目白学園大学)

## C. 研究結果及び考察

分担研究1「子どものライフステージにおける社会的養護サービスのあり方に関する研究」(分担研究者 庄司順一)

### 平成17年度

平成17年度は下記の研究を行った。まずIで、子どもの発達と養育環境について、専門家による論考、施設の小規模化に関する先行研究の文献研究により、課題を整理した。IIでは、質問紙調査、ヒアリング調査により、児童養護施設における生活環境および小規模化の動向について検討するとともに、専門里親を対象に、里親制度、専門里親制度のあり方について調査した。

#### I 社会的養護サービスのあり方に関する論考および文献研究

1. 子どものライフステージにおける社会的養護サービスのあり方の検討
2. 施設養育における愛着の重要性
3. 社会的養護の現状と今後のあり方
4. パーマネンシーの保障に向けて
5. 児童福祉施設の小規模化に関する先行研究

#### II 社会的養護サービスのあり方に関する調査研究

1. 児童養護施設の小規模化に関する動向と課題
2. 児童養護施設の食事環境に関する調査研究
3. 専門里親に関する調査

### 平成18年度

平成18年度は下記の研究を行った。前年度の児童養護施設を対象とした調査結果を詳細に分析

(クロス分析)するとともに(研究1、2)、自由記述の分析をおこなった。また同調査について今年度新たに調査した内容も含めて、施設の養育形態の小規模化の意義と課題について関係者へのヒアリング結果(研究3)をまとめ、建築図面の分析を行った(研究4)。そして、平成14年度に行われた才村純を主任研究者とする児童養護施設職員のタイムスタディ結果を、施設の規模との関係において再分析を行った(研究5)。今年度は全国の乳児院を対象に加え、児童養護施設とあわせて、小規模化の推進を阻害する要因について検討を行った(研究6)。専門里親については対象数を増すとともに、質問内容も詳しくして、専門里親制度を活用する条件を検討した(研究7)。

1. 児童養護施設の小規模化に関する調査ークロス分析及び自由記述の分析結果からー
2. 児童養護施設の食事環境に関する調査研究(II)ー施設の立地条件の食事環境に及ぼす影響、及び自由記述の分析ー
3. ヒアリング調査から見た小規模ケアの実態
4. 児童養護施設の建築学的評価に関する研究
5. 子どもの受けるサービスと職員の業務、および負担に関しての研究  
ータイムスタディの二次分析からー
6. 乳児院・児童養護施設の小規模化を推進するにあたっての問題
7. 専門里親に関する調査

分担研究2「愛着障害の視点からの被虐待児に対する援助・治療プログラムの開発」(分担研究者 藤岡孝志)

## 平成 17 年度

虐待等により愛着形成に障害をおった子どもと、その養育支援を行う大人（施設職員、里親等）との間の関係形成をはかり、促進するためのプログラムの作成を目的として、施設職員、里親等を対象に養育上の困難などについてヒアリングを行うとともに文献的考察を行い、その結果にもとづいて試行的なプログラムを作成した。このような援助プログラムへの養育者からのニーズは高いこと、心理療法的なプログラムだけでなく、コンサルテーションのレベルでのグループ・プログラムの効果や可能性が示唆された。

## 平成 18 年度

愛着形成に障害をおった子どもと養育者との関係形成を促進するプログラムは、現在も検討中であるが、現在の段階でのプログラムは、1) 児童養護施設における愛着形成プログラム、2) 子育て支援における愛着形成プログラム、3) 里親支援における愛着形成プログラム、4) 修復的愛着療法のプロセス分析、5) 夫婦の対する愛着コミュニケーション訓練プログラムの開発、の 5 プログラムである。

なお、プログラムの内容は、①子どもの状態のアセスメント、②養育者へのペアレンティング技法・心理教育、③養育者と子どものそれぞれが抱える愛着上の課題及び愛着の修復へのアプローチ、④相互の愛着関係の深化を図るアプローチ、⑤養育者のチーム、養育家庭のパートナー内での連携の支援、などの視点を踏まえたものとして構成されている。

プログラムを具体的に検討するとともに、関係者へのヒアリングを行い、実際に適用を試み（事例研究）、その結果をふまえてプログラムの再検討を行った。

## D. 全体の考察

分担研究 1 「子どものライフステージにおける社会的養護サービスのあり方に関する研究」の諸研究は、福祉学のみならず、心理学、栄養学、建築学といった学際的な研究チームにより、とくに施設養育における小規模化の意義と課題について検討を行ったものである。このような多領域の専門家による検討はこれまでにない研究だといえる。また、施設のあり方のみならず、里親制度を含め、社会的養護サービス全体を視野に入れたことも従来の研究にはほとんどない取り組みであったといえる。

2 年間の研究結果は、施設の養育形態を小規模化することの意義と課題を明確にした。小規模化の意義は認められたが、小規模ケアが施設間格差をもたらさないよう、また孤立化しないようにするための配慮と、小規模化推進を阻害する要因への対応を可能にする施策が求められよう。

分担研究 2 「愛着障害の視点からの被虐待児に対する援助・治療プログラムの開発」では、愛着形成に障害をおった子どもと養育者との関係形成を促進するプログラムを作成するとともに、愛着臨床の観点から下記の点について考察を行った。

1. 愛着形成における視座
  - 1) 赦し（ゆるし）の儀式
  - 2) 愛着の見直しによる「更なる愛着形成」「更なる愛着修復」
  - 3) リラクゼーションと愛着形成
2. 日本におけるプログラム適用の必要性
3. 複数のスタッフによる適用の可能性
4. 二週間トリートメントプログラムと継続的なプログラムの併用の必要性
5. 施設職員支援、里親支援における愛着形成プログラムの活用の必要性

## E. 結 論

分担研究1では、児童養護施設における建物設備（建築学）と食事環境（栄養学）からの検討を含め、養育形態の小規模化の意義が明らかとなった。しかし、その反面、小規模化による弊害、小規模化の推進を阻害する要因も明らかとなり、これらの課題への対応が重要な課題であることが示された。

分担研究2で紹介、検討した愛着形成、愛着修復をめざした治療プログラムは、わが国の社会的養護サービス（施設養育、里親養育）において多くの面で活用できると考えられる。しかし、今後

さらにこれらのプログラムが様々なところで活用され、改善されていくことが望まれる。特に、児童養護施設においては、施設内コンサルテーションの一環として、心理職によるケアワーカーに対する支援として、人生脚本や養育のためのペアレントング技法などが活用されることが望まれる。

## F. 文献

社会保障審議会児童部会報告書「児童虐待への対応など要保護児童及び要支援家庭に対する支援のあり方に関する当面の見直しの方向性について」（平成15年11月）



研究成果の刊行に関する一覧表

著者名	タイトル	発表誌名	巻号	ページ	出版年
庄司順一	里親とのきずな	そだちの科学	No.7	49-54	2006
庄司順一	今、求められる子どもの自立支援とは何か	月刊福祉	2006年 4月号	18-23	2006
庄司順一	里親制度を発展させるために	保健の科学	Vol.48, No.11,	852	2006
庄司順一	里親制度の現状と課題	里親と子ども	Vol.1	6-11	2006
庄司順一	オーストラリアのある里親援助機関の初期研修プログラム	里親と子ども	Vol.1	44-51	2006
澁谷昌史 庄司順一 有村大士 ほか	里親への初期研修の実態	里親と子ども	Vol.1	70-79	2006
庄司順一 澁谷昌史 有村大士 ほか	里親初期研修モデル案	里親と子ども	Vol.1	80-109	2006
澁谷昌史 小山修 庄司順一 ほか	里親制度の現状課題(V) 専門里親及び親族里親の実態と課題に関する研究	日本子ども家庭 総合研究所紀要	第41集	43-61	2006
小山修 澁谷昌史 才村純 ほか	国際養子縁組制度に関する国際比較調査研究	日本子ども家庭 総合研究所紀要	第42集	71-80	2006
小山修	研修の進め方	里親と子ども	Vol.1	12-20.	2006
鈴木力	施設養護における子どもの権利と人権を擁護する養育の質的向上への視点	社会福祉 (日本女子大学社 会福祉学会)	第46号	13-26	2006
鈴木力	児童養護施設における環境と関係からの自立支援の意味	福祉文化研究	第15号	15-30	2006
鈴木力	「ある日の私と子ども」をめぐって	季刊児童養護	第37巻2 号	6-7	2006

著者名	タイトル	発表誌名	巻号	ページ	出版年
藤岡孝志	虐待と愛着障害-修復的愛着療法-	そだちの科学 (特集 愛着とき ずな)	No.7	107- 112	2006
藤岡孝志	愛着臨床の観点からみた児童虐待への対応 に関する研究	日本社会事業 大学社会事業 研究所年報	第42号	(印刷 中)	2006
藤岡孝志	怒らない子・怒れない子にどう関わるか	児童心理	No.847	44-48	2006
加藤尚子	虐待を受けた子どもの援助職への心理コンサル テーションの適用にかんする文献的考察～ 児童養護施設における協働的心理支援モデ ルの構築に向けて～	コミュニティ 心理学研究	第10巻1 号	(採択済 み, 印刷 中)	2006
加藤尚子	心理コンサルテーションに関する基礎的研究 ～虐待を受けた子どもの援助職への適用を目的 として～	子どもの虐待と ネグレクト	Vol.8 No.3	376-387	2006